

Nagasaki University

環境科学部の研究室

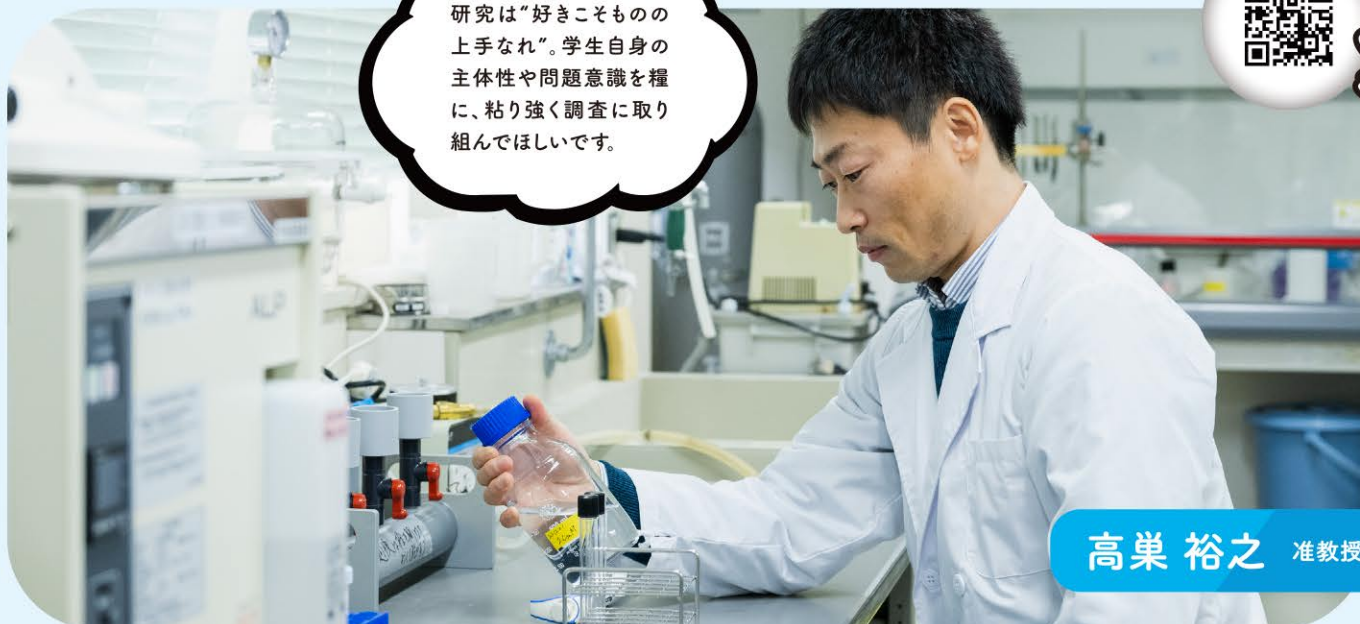
生物地球化学 研究室

海の栄養物質やプランクトンを分析 チームプレーで長崎の海を調査する

TAKASU Lab.



研究は“好きこそものの上手なれ”。学生自身の主体性や問題意識を糧に、粘り強く調査に取り組んでほしいです。



高巢 裕之 准教授

気候変動や人間活動により海が様々な影響を受ける中で、水質汚染や酸性化などが問題となっています。私たちが持続的に海から恩恵を受けるためにどんな対策をとるべきなのか、その議論の土台となるデータを調査・分析しています。研究室では、海の生き物の生息環境に着目。諫早湾や高島などで海洋観測を行い、持ち帰った水や泥を分析することで栄養物質やプランクトンの量を調べています。グリーンツーリズム団体や漁協関係者など、地元の方々と協力しながら継続的に調査するため、問題の歴史的背景の把握、社会的ニーズ

に沿った研究の意義付けが求められます。理系的な分析ですが、人とのコミュニケーションが重要です。

海洋調査は大学院生を中心に、学生ごとの得意分野を活かしたチームプレーが基本となります。海の生き物に興味があって研究室に所属し、卒業後は水質・環境分析系の企業に就職する学生が多いですが、組織で自分の強みを発揮する力はどんな進路でも役立ちます。主体的な研究活動が、課題解決に向けたアプローチの訓練になればと思います。



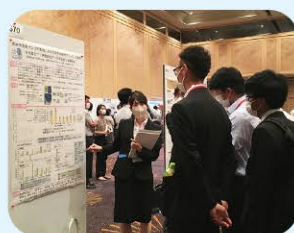
海洋調査は早朝出発 苦勞に勝る体験も

基本的に海洋調査は朝が早く、早朝5時頃に出港することも珍しくありません。夏は暑く冬は寒い環境で体力的に厳しい場面もありますが、美しい景色を眺めたり、間近で海の生き物を観察できたりもします。そうした体験の楽しさが苦勞に勝るタイプの学生に、向いていると思います。



特徴的な海域が 近くにある長崎県

諫早湾や東シナ海、有明海など、環境の異なる様々な海が近くにある長崎県は恵まれた研究フィールドです。生活する上で海との距離が近いことから地元の方の関心も高く、いろんな場面で協力する機会があります。海洋調査にコミュニケーションは欠かせません。



調査結果を理論的に まとめる能力を養う

実際の研究活動は調査している時間より、持ち帰った水や泥を分析したり、文章にまとめたりする時間が長くなります。順序立てて理論的な文章を書く力は、どんな進路を選んでも必ず役に立ちます。苦勞するかもしれませんが、学生には頑張してほしい部分です。



研究の中心は大学院生。
適宜アドバイスしながら見守ります。

たかす ひろゆき
愛媛大学大学院農学研究科修士課程、京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。その後、東京大学大気海洋研究所の研究員として、東日本大震災復興支援の研究プロジェクトや、外洋域における炭素貯留に関する研究に携わる。2015年11月より現職。